

Development of a City and Its Architectural Styles: Riga, Latvia

天内 大樹

デザイン学部 デザイン学科

Daiki AMANAI

Department of Design, Faculty of Design

近年に多い、日本とくに戦後を含めて通史的に扱った建築展には、その資料形態、資料保存の可否と場所、打ち出すべき歴史観のあり方という三つの問題点が認められる。このうち第三の点を、静岡文化芸術大学でも開催されたラトヴィア建築展の検討を通して考察する。年代順に区切った通時的展示に比べ、テーマ別展示はラトヴィアの歴史的事情、建築産業の状況から選ばれた形式であるが、ラトヴィア性を立ち上げる際の観光と実際の日常生活との関係など、検討すべき課題がある。そこで本稿では首都リガの発展史と並行した、建築物における歴史区分を提案する。ラトヴィア特にリガの建築において注目されがちなアール・ヌーヴォー様式を歴史の中に位置づけること、観光において看過されがちな木造建築をアール・ヌーヴォーとともに量を抱えるデザインとして位置づけること、さらに現代のラトヴィア人を取り巻く建築環境を歴史とともに位置づけることが目的である。

Comprehensive exhibitions on Japanese postwar architecture, recently burgeoning, involve three questions: forms of exhibits, feasibility and locations of preservation, and conflicts between completeness and originality of historical viewpoints. This paper probes the third point through investigating an exhibition on Latvian architecture. Compared with chronological exhibitions, thematic ones show some advantages when they intend establishing a Latvian way of thinking, Latvianness, in terms of Latvian complicated history and her turbulent situation in the building industry. They also want, however, a realistic consideration to the everyday life of her residents in spite of the touristic appeal. Consequently, we advance the historical divisions in Latvian architecture which derive from the development of her capital city, Riga. By so doing, Art Nouveau architecture, focused by historical researches of art and architecture and by the tourist industry, and Wooden buildings, often left unnoticed, will be equally established as prevalent and therefore important architectural styles in the city. Moreover, we will understand more of the contemporary built environments around her residents.

I. 記述の方法論——序言

A. 建築展と歴史記述

建築展、特に建築家個人に着目したものよりも、日本、中でも戦後を扱った通史的な展示が近年顕著である¹。そのことが胚胎する論点を三つに整理してみたい。

第一に、建築展一般に、展示にあたっての資料形態をめぐる問いがある。移動可能な絵画や彫刻などに比べ、土地に文字通り基礎づけられた建築物を移動させるのは容易でない。したがって、造作・照明器具・窓・内外装材・銘板など建築物の断片、模型（ときに実寸に拡大してインスタレーションと化す）・図面・写真・映像・設計者や使用者のインタビュー・解説者のテキストといった、建築物本体ではない資料が展示室を埋めることになる。この問いが成り立つ背景には、絵画や彫刻など作家が自らの手で制作し

た作品そのものを原資料として追求し、系統的なコレクションの形成・保存・展示に努めてきた美術館が、上記の困難にもかかわらず建築を取り上げるようになった近年の状況がある。その要因には、作品と展示空間の関係に対する原理的な関心もあるが、現代的な関心として、世界的な美術館ビジネスと、観光産業や都市再開発と結びついた建築との共犯関係への再検討があるだろう²。

第二に、資料保存の可否と場所の問題がある。都市の再開発に伴い、建築史上重要な建築物が解体されるという話題は、日本国内でもしばしば見られてきた。これに対し、美術館の収蔵も含めて、日本に建築のアーカイブはさほど顕著ではなかった。各地の民家園と同様の発想を近代建築に持ち込む、ハードルの高い移築保存が中心であったとすら言える³。ところが近年、各大学の資料館に加え、さまざまなアイデアに基づいた資料館が生まれつつある⁴。

¹ 後述するもの他に「戦後日本住宅伝説——挑発する家・内省する家」(2014-5、埼玉県立近代美術館、広島市現代美術館、松本市美術館、八王子市夢美術館)、「日本の家1945年以降の建築とくらし」(2017、東京国立近代美術館)、戦後という枠を超える「建築の日本展:その遺伝子のもたらすもの」(2018、森美術館)、また現代を取り扱ったがその背景に伝統を認める展示として「In the Real World: 現実のはなし〜日本建築の倉から〜」(2014、第14回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館)、「en [縁]: アート・オブ・ネクサス」(2016、第15回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展)、「日本、家の列島——フランス人建築家が驚くニッポンの住宅デザイン」(2017、パナソニック汐留ミュージアム)などが相次いだ。住宅が特権的なビルディングタイプとして扱われている点について、本稿に言及する余裕はない。

² Hal Foster, *The Art-Architecture Complex*, London: Verso, 2011 [ハル・フォスター、瀧本雅志訳『アート建築複合態』、鹿島出版会2014]。

³ 博物館明治村(1965-)、北海道開拓の村(1983-)、江戸東京たてもの園(1993-)など。近代建築では在来工法の民家に比べ、湿式工法が多用されるため、竣工当初の部材をそのまま用いるような解体・再構築は困難である。

⁴ 京都工芸繊維大学美術工芸資料館(1980-)などに加え、NPO西山卯三記念すまい・まちづくり文庫(1997-)、大分市アートプラザ磯崎新建築展示室(1998-)、日本建築学会建築博物館(2003-)、新建築社の建築・景観写真のデジタル修正事業から始まった建築・空間デジタルアーカイブスDAAS(2006-)、日本建築家協会と金沢工業大学のジョイント(JIA-KIT建築アーカイブス+金沢工業大学建築アーカイブス研究所、2007-)、新規設置の武蔵野美術大学造形研究センター(2008-)、映像・画像・音声のウェブ保存に特化した早稲田建築アーカイブス(2010-)、個人の発案に始まったという愛媛県大三島の今治市伊東豊雄建築ミュージアム(2011-)、寺田倉庫株式会社による模型に特化した展示・保存施設「建築倉庫ミュージアム」(2016-)など。伊東豊雄「今治市伊東豊雄建築ミュージアムの開館に向けて」、今治市伊東豊雄建築ミュージアムウェブサイト、<http://www.tima-imabari.jp/about/>、2018.11.14確認。

文化庁も2013年に国立近現代建築資料館を設立し、企画展示と予約による資料閲覧を行っている。分散しながらも続々とアーカイブを整えつつある現況の背景にある危機感、いわば世代交代のタイミングで名だたる建築家が遺した資料群の散逸に対するものに加え、建築資料とりわけ手書きのスケッチや設計図が美術作品に近い扱いを受け始めたこととグローバル経済の拡大とによる、国内資料の海外有力美術館への「散逸」に対するものが大きいだろう⁵。2014-5年に金沢21世紀美術館で行われた「ジャパン・アーキテクツ1945-2010」展では、ポンピドゥーセンターが収蔵した戦後日本建築に関するコレクションが、戦後日本建築の通史的な展示の中核をなした⁶。植民地主義の時代に欧米列強が形成した古代文明のコレクションが各地からの「収奪」の上に成り立っていること、日本においても廃仏毀釈など明治期の混乱や浮世絵に対する評価基準の未形成などから、近世の文物を中心に大量に流出ないし「避難」したことなどが想起されるが、ナショナリズムを排して考えても次の問題は避けて通れないだろう。

すなわち第三に、展示内容に示されることになる視点および歴史観に関して、系統性・網羅性と一貫性また新規性とが、ときに相克する点が挙げられる。前記「ジャパン・アーキテクツ1945-2010」展には、国内の文脈で比較的重視されてこなかった建築家に対する独自の関心と収集が窺えた。建築史家の戸田穰はこの「乱暴な外部からの視線の背後には、海外における日本建築の受容の問題が控えている」と指摘する。原資料の展示という方針を貫いた「日本語を解さない者が、距離を隔てて日本建築を眺めた」とき、「美術館におけるオブジェの視覚的・形態的な展示価値を専らとする」方法論が顕著に浮上するといえる⁷。そこには、第二次大戦後を中心にアメリカ合衆国で文学批評に流行したニュー・クリティシズムに対する「作品と世界のあいだの靱帯を切り離そうという営為」⁸という形容さえ該当しよう。当時の日本建築界に内在した種々の議論を捨象して、独自の選定からストーリーを編み出す方法論に、批判的な視点から吟味が加わることは避けられない。しかし一方で、何であれ対象を通史的に記述しようとするとき、数多の実例に言及する網羅性や系統性よりも、辞書項目と

しての可読性を優先させ、一貫して新たな視点の提示に努める態度も、こと字数や展示室面積、原資料の入手可能性といった限界の下では許容されないだろうか。また、一定の学術的な質の担保を必要条件としつつも、学界で共有されてきたストーリーと異なる視点を提示すること自体は、批判の対象としてであれ歓迎されるべきといえる。これは歴史記述の視点をめぐる、おそらく原理的な問題であろう。展示に示されるのは、いつでもペンディング中の歴史観であると考えるのは、懐疑に偏しているだろうか。

以上の論点から建築の通史とそれを扱う展示について今後も考察を重ねていきたいが、本稿では近代日本というフィールドから一旦離れ、バルト海沿岸のラトヴィア共和国について検討する。北海道より小さく、九州と四国の合計よりは大きな面積に、1918年の独立後のピーク時で京都府ほど、現代では岡山県ほどの人口を抱える⁹同国の建築を通史的に語ることは、建築物の数からみると簡単に見えるが、語るべき枠組みからみると非常に難しい。静岡文化芸術大学でも開催された、同国建築に関する展示について次節で概観し、本論で別の視点からその歴史を語り直してみたい。

B. 建築展「ラトヴィア、融合の建築」

本展(英名"Latvia, Architecture at Convergence")は、駐日ラトヴィア共和国大使(当時)夫人で建築家のダツツェ・ペンケ氏と建築家でキュレーターのイルゼ・パクローネ氏らの主導で、駐日ラトヴィア共和国大使館と新建築社編集部との協力で進められた。2017年に東京工業大学、京都市芸繊維大学、静岡文化芸術大学、宮城大学を巡回した¹⁰。筆者はその企画構成には携わっていない。展示では会場により事情が異なるものの、おおよそ10の鍵概念¹¹が、解説パネルと数枚の写真を貼付した門型の什器("Gateway")¹²10台に表現され、傍にラトヴィアと日本の歴史を並行させた年表と現地写真のプロジェクションが示された。Crossroadsでは、ラトヴィア史上に交叉した物流、軍事などの諸力に着想を得ている。Evolving Archetypeは、現前のもから重層的な同国の歴史を通じて淵源を想起する契機を示す。Inherited Symbolsでは各時代の特徴が各々継承されてきたことを示す。Pomp and Circumstance

⁵ 伊東豊雄の世界的な名声につながったせんだいメディアテーク(2000)の模型は、ニューヨークの近代博物館(MoMA)に収蔵されている。榎原充大「建築をアーカイブすること」ニッシャ印刷文化振興財団「AMEET」2014.3.10、<https://www.ameet.jp/digital-archives/391/3/>、2018.11.14確認。

⁶ フランス国立近代美術館(ポンピドゥー・センター)副館長フレデリック・ミゲルーの主導で形成されつつある世界的な建築資料コレクションの一端としての収集である。戸田穰「建築展の問題——三つの展覧会を通じて」『建築史学』n.64, 2015, pp.61-73, 特にpp.64-68。

⁷ 同上。

⁸ 越智博美「新批評」、大橋洋一編「現代批評理論のすべて」2006, pp.12-15, 引用はp.14下段。

⁹ ラトヴィア側の人口はGunita Zariņa, "The main trends in the palaeodemography of the 7th - 18th century population of Latvia", *Anthropologischer Anzeiger*, Jahrg. 64, H. 2 (Juni 2006), 189-202, およびCentral Statistical Bureau of Latvia ed., *Demography 2018*, Riga, 2018, 日本側の人口はすべて2017年の推計人口に基づく。<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2017np/pdf/gaiyou3.pdf>, 2018.4発表, 2018.11.14確認。

¹⁰ 2018年には神戸大学、関西学院大学、文京学院大学にも巡回したようである。http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/event/2018_04_19_01.html, <https://www.kobe-np.co.jp/news/sanda/201805/0011243127.shtml>, <http://www.u-bunkyo.ac.jp/news/page/2018/11/post-301.html>, 2018.11.14確認。

¹¹ 東京以外の展示では、以下に述べる10の概念のうちSilent Song, また現地写真のプロジェクションが省かれた。また静岡文化芸術大学では公開講座「ラトヴィア文化ウィークス」を併催し、建築以外の面からラトヴィア文化を紹介した。近藤涼香, 西尾かなで, 藤原薫平, 天内大樹編, 静岡文化芸術大学2017年度前期公開講座・企画展「ラトヴィア文化ウィークス記録集」, 静岡文化芸術大学デザイン学部天内研究室, 2018.3. 本展の巡回のためご尽力いただいた駐日ラトヴィア共和国大使館, 新建築社, 展示初日に本学にお越しくくださった駐日ラトヴィア共和国ノルマンズ・ペンケ特命全権大使, ダツツェ・ペンケ大使夫人, また公開講座にご講演をいただいた岩手大学堀口大樹准教授, SUBARU店主溝口明子氏に厚く御礼申し上げます。

¹² 高さ2200mm, 幅2000mm(片方から475mmの位置にもう1本の柱が立つ), 奥行950mmの木枠で, 正面/裏面に1面ずつ都合2枚の解説パネル(475mm×2200mm), 側面に内外2面ずつ都合4枚の写真または解説のパネル(950mm×1200mm)が取り付けられた。

は住居の贅沢さが取り上げられるが、農村の豊かさはこれから排除されるものではない。Urban Solitudeでは一人になれるという農村部の余裕と緩やかなつながりを都市部でも感じさせる建築空間を取り上げる。Inside Outでは建物内外の連続性ないし開放、Poetic Pursuitでは周囲に拡大する感受性を一定の輪郭をもった造形に縮約することを指し、Hard Softnessは強い影響力を柔らかく受け止め既存のものに関連づけるというラトヴィアの歴史と関連の深い要素が取り上げられた。Silent Songでは静寂でありながら相互理解が表層の奥に見え隠れすることを、Harmonyでは矛盾する文化の流れが一つに融和することを示した。

年表が別途用意されたとおり、10のテーマに基づく本展示は歴史順に建築物を配列するような展示ではなく、前節で取り上げたものと同様、ある設定されたテーマに合致する建築物を複数取り上げることで、古今の時代をリンクさせたものである。そのことで期待される効果はおそらく次の通りだろう。

第一に、統治主体が転々とした同国の歴史に対し、建築物とそこに示される生活様式という物質的なよすがに継承されたものとしてラトヴィア性を定義できる点が挙げられる。ラトヴィアの歴史上、ハンザ同盟都市と周辺村落という社会構成に対し、ポーランド・リトアニア、スウェーデン、ロシアなどが統治主体として次々と現れた。ドイツ帝国軍およびバルト・ドイツ人勢力とロシア帝国軍およびソヴィエト連邦軍に蹂躪された第一次大戦後、1918年に宣言されたラトヴィア臨時国民評議会による独立が達成された。しかし、ソ連軍がナチス・ドイツとの不可侵条約に付帯する秘密議定書に基づき1940年に侵入すると、ラトヴィアは併合され、戦中はドイツ軍も侵入・占領した。戦後同国はソ連占領期を経て、1989年の「人間の鎖」に代表される運動により、1991年実質的な独立を回復した¹³。その間の民族構成を見ると、ハンザ同盟以来都市を中心に定住してきたバルト・ドイツ人は、19世紀のロシア化政策の下で衰退し、代わって農村部から都市に進出した者を中心にラトヴィア民族意識が高まった。バルト・ドイツ人は第一次大戦でも力を発揮したが、先の秘密議定書以後、ドイツ領内に移住した。一方、ソ連占領期にはロシア人が労働者として多数送り込まれて定着し、独立回復時も首都リガと南東部を中心に多くが残った。現在でもロシア人ほか民族構成の25%を占め(ラトヴィア人62%)¹⁴、言語構成ではロシア語が30%に達する¹⁵。このように体制の連続性よりも分断が目立つ歴史の下で、分野横断的にラトヴィア的なものを定義することは困難であろう。ラトヴィア共和国領内に遺された／建てられた建築物を広く取り扱いながら、歴史上の建築物の場合は施主、設計者、使

用者の国籍や民族的出自をあまり問わずにラトヴィア性を構築するのに、年代別よりもテーマ別の方がなじみやすそうである。

第二に、近現代建築だけでなく中世以来の建築物の蓄積を素直に訴えられる点が挙げられる。ソ連占領下では民族性を表現することができなかつたため、戦後の建築物といえりガ駅の南に建つ高さ108メートルの鉄筋コンクリート建築、ラトヴィア科学アカデミーが典型とされるスターリン様式と、フルシチョフ時代に転換して郊外住宅地区に大量に建造されたコンクリート重量パネルによる高層アパート群がおおよそその産物である(本論で詳説する)。おそらく旧ソ連圏全般に亘った反動として、1980年代以降、たとえばリガに近接したリゾート地ユールマラなどに、コンクリートによる不規則な造形を示した建築物がいくつか建てられているが、これもラトヴィア性を示すものとは言えない。都心部に建つ高層のホテル・ラトヴィヤ¹⁶は、ソ連占領期に西側資本を実験的に導入した、ガラス外装の端正なモダニズムと言えるが、これも中世以来のリガ旧市街のスカイラインを乱しているという理由で解体が検討されている。占領期の凄惨な記憶を喚起する建築物への対処についても、ロシア系住民の存在によってばかりでなく、ラトヴィア系住民の負の記憶に対する態度の個性性からも、合意は容易に見込めまい——東日本大震災後の我々には想像しやすい。さらに、独立回復後のラトヴィアにはソ連占領期に分担していた工業生産が残らなかったため、同国経済は順調とはいいがたい。金融と内需に偏った経済により、同国はリーマン・ショックに始まる金融危機を正面から蒙る結果となり、失業率は2008年12月から1年間に7%から22.8%に上昇した¹⁷。すなわち、独立回復後の経済を牽引した住宅投資そのものが負債と化したことは、建設投資が良質な建築物を順調に蓄積できなかったことを示す。そうした中でも良質な近現代建築を紹介しようとするれば、取り上げる建築物は網羅的というよりは、選択的な視点によるピックアップになるだろう。

それでも同展がラトヴィア性を訴えた動機については憶測の域を超えないが、2014年のクリミア危機はひとつの切っ掛けだろう。同国にはロシアと国境を接し、ロシア系住民が半数以上を占める行政区域もある。今も天然ガスは全量をロシアから輸入し、マスメディアでもロシアの衛星放送が存在感を放っている同国の現状で、ソフトパワーの概念が浮上するとき、ユネスコ世界遺産でもあるリガ市を中心として、建築物の蓄積からラトヴィアという存在をアピールするのは、自然な成り行きだろう。しかしラトヴィア人一人一人の生活に密接に結びついた建築文化を、ラトヴィア固有の性質からすべて説明できるだろうか。ラトヴィアに押しつけられたとも見える(共産)世界標準とし

¹³ ソ連の「占領」、独立の「回復」といった表現で、同国は1918年以後の独立の連続性・正統性と、1940年から1991年に及ぶソ連・ナチス双方による占領の不法性を訴えている。本稿はこの歴史観の是非を問うものではないが、解説の対象たる同国の表現に即する。

¹⁴ Central Statistical Bureau of Latvia, op.cit.

¹⁵ ウクライナ人、ベラルーシ人を含む。堀口大樹「ラトヴィアにおける言語状況と言語政策・言語教育政策」、東京外国語大学平成18-20年度科学研究費補助金プロジェクト「拡大 EU 諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」2009.3, pp.27-50, http://www.tufs.ac.jp/common/fs/llr/EU/EU_houkokusho/horiguchi.pdf, 2018.11.14確認。「非国籍者」のカウントを含めて、37%に達するという統計もある。https://en.wikipedia.org/wiki/Demographics_of_Latvia(2011年の同国政府調査に基づいている)、2018.11.14確認。

¹⁶ 現ラディソン・ブル・ラトヴィア・カンファレンス&スパ・ホテル・リガ。

¹⁷ https://en.wikipedia.org/wiki/2008_Latvian_financial_crisis, 2018.11.14確認。

てのコンクリート重量パネルの高層アパートも、筆者には十分特徴的なものにみえる。この蓄積を現代および将来にどう活かすかこそ、戦後に工場労働を中心に人口が集中し始め、フルシチョフ政権と同時期、核家族世帯向けインフラとして共同住宅を大量に整備し蓄積してきた、浜松のような都市にとっても興味深い問いである¹⁸。リガ新市街に前世紀前半に集積されたアール・ヌーヴォーまたはユーゲントシュティルの建築も、その当時は突出した傑作として以上に、都市において量を担ったベーシックな存在だったかもしれない¹⁹。ラトヴィア人のベーシックに迫る建築の歴史観を、本稿は日本語ながら追求してみたい。したがって、前節における建築展に関する三つの論点のうち、本論は特に第三との関係が中心になるであろう²⁰。

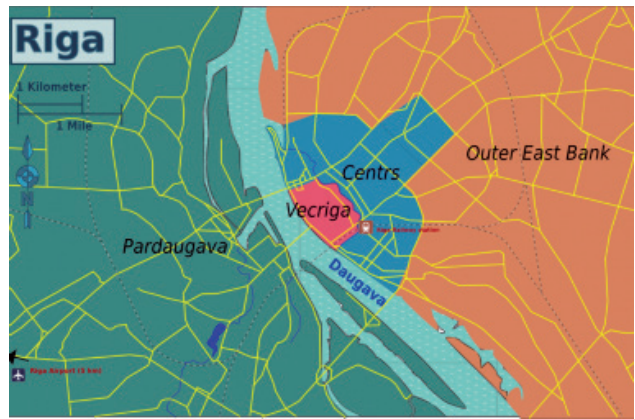


図1：リガ市内

II. ラトヴィアの建築史的展開——リガ市を中心に²¹

ラトヴィアの建築を語る上で、前章のように国家の枠組みが必ずしも自明のものではなかった経緯から、本章では市域でラトヴィアの人口の3分の1にあたる64万人、都市圏で107万人を抱える首都リガを記述の中軸とする。都市リガがあって国家ラトヴィアの枠組みが生まれたとも考えられる側面、またいまや二拠点居住によって国の全域がリガとの関係を深めつつある側面を重んじた。以下、観光サイトwikivoyage.orgに従い、中世以来の町並みを遺した旧市街Vecrīga、19世紀末から開発が本格化した新市街Centrs、行政域としての市内を南から北に貫き、旧市街の西をかすめるダウガヴァ川の東に拡がりソ連占領期に大きく開発された東岸地区（リガ市内の行政区分に比べると少々大雑把ではある）、同川の西岸に拡がり独立回復後に空港に近接して開発が進む西岸地区Pārdaugavaという分類を用いる [図1²²]。

A. 19世紀の木造建築——ユネスコ世界遺産の登録基準から

世界遺産「リガ歴史地区」に指定された区域は、行政としてのリガ市324平方キロメートルの全域のうち438.3ヘクタールである。ただしその中に旧市街は全域が含まれている。次の引用はユネスコのサイトにおける物件の該当登録基準と、登録内容である。中世の街並み、アール・ヌーヴォー建築を強調する一般的な観光ガイドと比べて目を引く点は、「19世紀の木造建築」という文言であろう。

登録基準 (i) —— 人間の創造的才能を示す傑作である：リガ歴史地区における中世とそれ以降の都市計画の枠組

み、また世界のどこにも比肩しえないアール・ヌーヴォー建築の量と質、さらに19世紀の木造建築が [リガ歴史地区に] 顕著な普遍的価値をもたらしている。リガ歴史地区はアール・ヌーヴォー建築を世界でもっともよく集中させている。

登録基準 (ii) —— 建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観設計の展開に関して、ある期間、ある文化圏内において、人文的価値の重要な流通を示すものである：リガはバルト海文化圏において多大な影響力をふるい、建築、記念碑的彫刻、庭園設計における展開をもたらした²³。

19世紀の木造建築という要素は、都市の中の分布から考えるとアール・ヌーヴォー建築と同時期に広がったものと考えられる。そこで旧市街から新市街へのリガの発展の特徴を捉えるため、2つの人口統計を見てみよう。一方はラトヴィア全体の人口であり [図2²⁴]、他方はリガの都市的地域の人口である [図3²⁵]。グラフの形状を見ると、両大戦時の人口の落ち込みが顕著であり、また独立回復以降、国としても首都としても人口減に直面していることが見て取れる。ただし、国としては（まだ政体は成り立っていないものの）第一次大戦以前の人口がピークだったのに対し、リガの人口は特にソ連占領期に大きく伸びたことがわかる。現在のリガの人口のうちロシア系住民の割合が4割ほどであることを考慮すると、第二次大戦およびソ連占領による人口減²⁶から回復した人口のうちおよそ半分がラトヴィア域外からの流入、半分がラトヴィア人の

¹⁸ 街中の平凡な建築物に対する美学的な価値観が、使用者の働きかけ(具体的にはリノベーションなど)を促すこともある。天内大樹、脇坂圭一、土屋和男、柳沢究「静岡県内の防火建築帯および防災建築街区における建築物に関する研究 その3 前現代都市の美学的評価」、日本建築学会東海支部2017年度研究集会、名古屋大学東山キャンパスES総合館035講義室、愛知、2018.2.20。

¹⁹ 内田祥士「宮緒論——希望の建設・地獄の宮緒」NTT出版2017に表現を借りた。

²⁰ なお、フランクフルトでリガの現代建築に絞って開催されたテーマ別展示の記録として、Oskars Redbergs ed. *9 Conditions of Riga*, Riga: Megaphone Publishers, 2013がある。

²¹ 以下は静岡文化芸術大学2017前期公開講座「ラトヴィア文化ウィークス」シンポジウム「ラトヴィア、生活と文化」(2017.6.17)席上での口頭発表「リガの発展と建築」前掲「ラトヴィア文化ウィークス記録集」pp.35-38に加筆・整理したものである。

²² <https://en.wikivoyage.org/wiki/Riga>, 2018.11.14確認。同図はリガ市の行政区域としてのVecrīgaと比べても多少の差異がある。

²³ 登録基準 (i) と (ii) の内容に関しては <https://whc.unesco.org/en/criteria/> および <https://whc.unesco.org/fr/criteres/> を、リガ歴史地区の記述に関しては <https://whc.unesco.org/en/list/852/> および <https://whc.unesco.org/fr/list/852/> を参照し、筆者が訳した。2018.11.14確認。

²⁴ Gunita Zariņa, Op. cit.

²⁵ Sigurd Grava, "The Urban Heritage of the Soviet Regime: The Case of Riga, Latvia", *Journal of the American Planning Association*, 59:1 (1993), pp. 9-30.

²⁶ 戦争そのものによる被害や移住ばかりでなく、ソヴィエト政府による粛清・投獄や東方への強制移住、これらを嫌った亡命も大きな要因である。

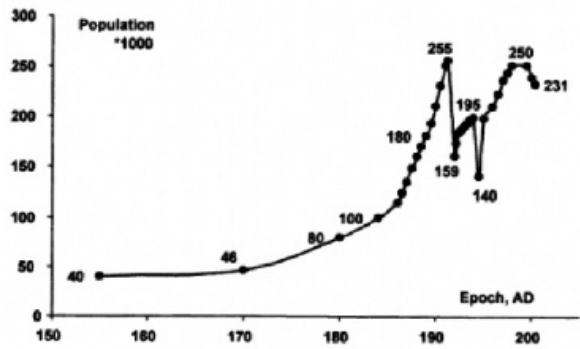


図2. ラトヴィアの人口, 1500-2000

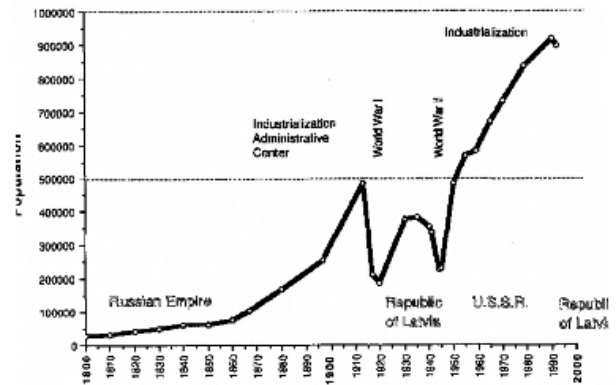


図3. リガの人口, 1800-2000

増加であり、後者はリガ市民の自然増と農村部からの流入が含まれているだろう。戦後復員等による人口増と、都市化による人口増のタイミングが重なった点は、西欧諸都市よりも日本の都市に近い。

リガにおける木造建築は第一次大戦前の人口のピークに向かった時期のものとして位置づけられる。ラトヴィアという後背地の人口が最大になり、また独立以前のロシア国内での物流や取引が円滑だった頃に、現代でも同国の産業の大きな割合を占める林業に由来する産品で建築物を構築するのは、自然なことである。煉瓦を主体とするアール・ヌーヴォー建築に比べると、おそらく坪単価も動員される技術も低廉に抑えられるだろう。同時期に発展したフィンランドの首都ヘルシンキでは、土とのつながりを切り離せなかった都市進出者が、道路境界線に接せずにセットバックさせて木造住宅を建てて、残りの敷地で園芸や近郊農業を展開したという²⁷。またアニタ・アンテニシュチェはすでに19世紀前半、旧市街の外に市街が拡張し始めていたが、防衛上の理由から建築物が木造で建てられ、実際に1812年、ナポレオンの軍勢がやってきたという誤報により焼き払われたこと、その後古典主義や折衷的なアール・ヌーヴォーなど石造建築の装飾を木造で模す例が増えたことを報告している²⁸。したがって農業従事者が都市に進出したというだけでなく、建築家自身もラトヴィア性を意識し、新たな国民国家の首都となるべき都市にふさわしい住宅としてあえて木造を選び取った可能性もある。

現在特に木造住宅が多く遺された地域として、ダウガヴァ川中洲の高級住宅街チーブサラと、リガ駅の南、ラトヴィア科学アカデミーの南に広がるモスクワ地区の2つが挙

げられる。前者では元々漁村だったところに、リガからダウガヴァ川を渡り帰宅することを厭わない階層の住宅が建ち並ぶことになった [図4²⁹]。後者は1941年7月に焼き払われたシナゴグの跡が遺されていることや、地区名そのものから判るとおり、モスクワとの舟運を担った水夫が元々住み着き、その後1868年から1913年にかけて25.1%から19.3%に下がったリガのロシア人人口³⁰の代わりに、19世紀後半から進出し1881年には8.4%を占めるに至った³¹ユダヤ人が住み着いた鉄道駅近接の地区である [図5]。とはいえどちらも世界遺産指定以降のジェントリフィケーションの波を受けて保存されているだろう。以上の木造建築は次節で整理する歴史区分では第二の区分に当てはまるが、ユネスコの登録基準に記された、リガに



図4. チーブサラの木造住宅, 2017

²⁷ 伊藤大介「ヘルシンキ 都市と建築の系譜」日本フィンランド都市セミナー実行委員会編『ヘルシンキ・森と生きる都市』市ヶ谷出版社1997、とくにpp.34-37。アメリカの美術史家マンズバックは、木造建築がリトアニアには見られず、エストニアには見られることを指摘している。ただし1930年代のエストニアの首都タリンで、ヘルベルト・ヨハンソンなどの建築家を除いて木造の外壁がそのまま露しになることはなく、コンクリート造を擬した漆喰仕上げが施されたという。S. A. Mansbach, "Modernist Architecture and Nationalist Aspiration in the Baltic: Two Case Studies", *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 65, No. 1 (Mar., 2006), pp. 92-111. いずれにせよ各国の類似と相違に関しては、注意を払わねばならない。

²⁸ Anita Anteniške, "National Romanticism Apartment Buildings of Riga", <http://www.artnouveau-net.eu/LinkClick.aspx?fileticket=x8GTLcdkU0%3D>, accessed 14 Nov. 2018.

²⁹ 以下註記なき写真は筆者撮影。

³⁰ Anteniške, op.cit.

³¹ <https://www.mfa.gov.lv/en/about-the-ministry/publications/latvia#2>, accessed 14 Nov. 2018. また同時期、ドイツ人の割合は42.9%から13.3%に減少し、ラトヴィア人のそれは23.6%から42.2%に増加した。その間のリガの人口増を考えると、ドイツ人人口の変化よりはラトヴィア人の流入の激しさが判る。



図5. モスクワ地区の木造住宅, 2017

関する一般的な観光案内とは異なる部分を先に扱った。

B. リガの歴史記述——4つの時代区分

リガの建築に関しては特にアール・ヌーヴォー建築の様式的分類などに集中して議論が重ねられてきた³²。これは前節で扱った木造建築同様、新市街の拡張に伴って多く建てられた建築物である。以下、都市リガの位置づけの変遷に伴う4つの時代区分から都市の成り立ちと建築を結びつけて論じるが、新市街の拡張は第2の時期に当たる。個々のアール・ヌーヴォー建築に関する記述は必然的に薄まるが、この4つの時代区分を理解することがラトヴィア建築の包括的な理解につながるものと思われる。

(1) 港町リガ——バルト海とロシアの結節点

本章冒頭で述べた地域区分でいうと、この時期のリガは旧市街のみであり、19世紀中頃に壊された城壁に囲まれた地区である。記録上は2世紀から見られ、ダウガヴァ川を介したヴァイキングと東ローマ帝国との通商の中継地点として集住が始まった。しかしキリスト教勢力と異教徒との争いから、1200年、北方十字軍の一環としてシトー会のアベルトが来襲し翌年リガに本拠を置くことに成功、1202年にリヴォニア帯剣騎士団を創立した。このときの司教館の敷地に現在建っているのは、1297年に創立された聖ヤーニャ教会で、17世紀に建物は再建され教会組織はルーテル派となっている。司教座教会は1211年にまで歴史を遡れるが、煉瓦が斜めに積まれた外壁は1595年の再建時のものである。リヴォニア帯剣騎士団は1237年にはドイツ騎士団に吸収されリヴォニア騎士団を名乗るが、1282年に都市ハンザに加盟した市民との対立をしばしば起こしていた。騎士団が市民を制圧したのち、1330年に破壊された要塞を市民に再建させたのが現在のリガ城であるが、これも一旦荒廃し、1515年に再建さ

れたものが現在残っている。リヴォニア戦争(1558-83)によるポーランド・リトアニア合同以降を近世と見なす歴史区分³³からすれば、この城壁が唯一中世を物質的に遺した部分と言えよう。ドイツ系が中心を占めた市民はバルト海とロシアの中継貿易を主な生業としており、1561年のドイツ騎士団解散後も、リガはポーランドの進出まで20年間帝国自由都市の地位を保った。富の蓄積は、1209年に木造教会堂を構えていた聖ペテラ教会が15世紀を通じて石造建築となり、136メートルの尖塔を建てるに至ったことにも見える。なおこの尖塔はしばしば倒壊や落雷に遭い、近年では第二次大戦で破壊されたが、現在は再建されている。

世俗建築では、ブラックヘッドの館は1334年に建てられたドイツの未婚商人組合のホールで、その名は彼らの守護聖人たるヌビアの人モーリスに基づく。1941年に破壊された後の敷地は、ソヴィエトにより広場として使われていたが、独立回復後1995-1999年に再建された。リガ城の火災前の2012年に大統領官邸が移転してきており、再建の経緯と併せ考えると都市ハンザの記憶はリガの歴史の淵源として素直に受け止められているようである。旧市街にはこのほか住宅クラスの規模でも近世の建物が遺されている。1605年に建てられ1696年、1755年に再建されたメンツェンドルフ家住宅はリガ歴史航海博物館の分館として使われている。三人兄弟と呼ばれラトヴィア建築博物館として使われている3棟並んだ建物も、もとは順に17世紀後半、1646年、15世紀のものだったが、1955-7年に再建されている。再建とはいえオリジナルに近い状態を作りそれを保存する体制が整えば、街並みとしての体験は十分可能であろう。

(2) 民族の都リガ——近代都市への離陸

新市街の成立に向けては、先述した1812年のナポレオン戦争時の出来事にみるように、城壁の解体前から、後に新市街と呼ばれる地区では木造建築が建ち並ぶ姿が完成していただろう。1857-63年に城壁が壊され、旧市街を取り囲むこの敷地から近代的な都市施設——公園、ブルヴァール、行政庁舎、劇場、後に大学などが展開し、都市外縁に向けて別荘、工場、教会、商店、学校などが散在した。1870年には鉄道が開設され、バルト海とロシアの結節点としてのリガの役割は増した。すでに1856年には、鉄道駅と隣接してダウガヴァ川から水を引き込んだ内港が都市計画図に掲載されている³⁴。現在リガ駅と百貨店を介して接するバスターミナルや、水面として残っている旧市街を取り囲む運河の一部を挟んだ中央市場の敷地である。新市街の開発は東京の郊外住宅地に比べてかなり広範であるが、これは元々自然空間を日常的に必要なとするラトヴィア人の生活故に、郊外住宅の区画規模がかなり広いからであろう。1901年にはリガ北北東のキシ湖湖畔に田園都市メジャパルクス11821平方キロメートルが計画され、整

³² 浩瀚なものとしてはJānis Krastiņš, *Rīgas Jūgenstila Ēkas [Art Nouveau Buildings in Riga]*, Rīga: ADD projekts, 2007. 日本語では伊藤大介「ラトヴィアの首都リガのユークラシック建築——“新たな”北欧建築の登場——」『北方生活研究所所報』No.26, 2001, pp. 2-13がある。美術全般と建築を包括的に扱ったものとしてSteven A. Mansbach, *Riga's Capital Modernism*, Leipzig: Leipziger Universitätsverlag, 2013がある。

³³ 例示すると<http://www.onlatvia.com/german-crusader-states-until-1561-68>, https://en.wikipedia.org/wiki/History_of_Latviaなど。2018.11.14確認。

³⁴ Krastiņš, op.cit., p.9.

備が始まった。

制度面でも、1858年に技術協会が設立されると、すでにその半数を建築家が占めていた。1862年にアレクサンドル二世の勅許の下とはいえ、帝国初の³⁵私設ポリテクニークが開設され、1869年同校に建築学科ができると、私設の技術・美術学校、各種団体や展覧会などが国家の管理の外で花開く。入学者の出身は地域的にはワルシャワからクリミアまで幅広いが、1896年までギムナジウム卒業者に限られていた。しかし教育環境が整備されると、リガに事務所を置く建築家は、1870年代に15人で、ほとんどはベルリンかサントペテルブルクの卒業生だったところ、1900年には50人ほどに増え、その半数以上がポリテクニーク卒業生となった。他にもリガドイツ人工芸協会（Gewerbeverein）の工芸学校が1872年に開かれた³⁶。欧州主要国で長い伝統を誇るアカデミー系の建築教育機関と比べたポリテクニークの評価について、伊藤大介は「工学技術優先」でありながら「様式への深い歴史的認識を伴わない」故に様式の「取捨選択に自由度が高く」、結果的に「建築の文化面の変質を支えた」とする³⁷。しかしポリテクニークの学部はマンズバックによると開校当初の工学、化学農業に加え、機械（1864）、商業（1868）、建築（1869）の順に開設された³⁸。工学（土木中心か）と異なる建築学科の設立の要因には、建築という営みに工学的アプローチ以外の教育も必要との判断があったと思われる。リガのポリテクニーク以外の各種学校の設立から、またラトヴィア人初の建築家と目されるヤーニス・フリドリヒス・バウマニスのようにベルリンとサントペテルブルク双方のアカデミーを卒業した者の存在から、さらにはサントペテルブルク土木学校（現サントペテルブルク国立建築土木大学）出身のミハイル・エイゼンシュテインのように、建築家に次ぐ建築工匠の資格者も作品を遺したことから、リガの建築装飾の折衷性は、ポリテクニークの教育だけに帰するとは判断しにくい。

この時期の建築についてはすでに研究の蓄積がある。ラトヴィアの建築家ヤーニス・クラスティンシュは「折衷装飾のアール・ヌーヴォー」（エイゼンシュテインの過剰の装飾は「断じてリガのアール・ヌーヴォーの典型ではない」という）、複数階を跨ぐ出窓などで分節した「〈垂直〉アール・ヌーヴォー」、ドイツ語圏やとりわけフィンランドに刺激を受け、ラトヴィアへの人類学的探究の結果としての文様や民俗建築に取材してアール・ヌーヴォー的な曲線にまとめた「民族ロマン主義」、リガに例は少ないが端正な長方形を取り入れた「新古典主義」という分類を設けている。これまで農村部を中心に分布していたラトヴィア人の都市への流入により、ダイナスなどに代表される人類学的な研究対象が浮上し、文様や木造建築への探究が、リガに

おける国民国家ラトヴィアの首都としての形成過程と相互作用をもたらしたことは特筆すべきであろう。リガの北東に建設されたラトヴィア民族野外博物館は独立後の1924年に設立されている。こうした状況下で、中には旧市街の、例えばブラックヘッドの館を新市街で模倣したような建物もある。また筆者の観察では、リガ新市街は木造建築を除いても必ずしも狭義のアール・ヌーヴォー（あるいはユージュントシュティル）のみに占められてはおらず、ゴシック・リヴァイヴァル、ジョージアンなどを選んだ建物、またチェコ・キュビズムや水平線を強調するモダニズムの影響なども認められる。

（3）工業都市リガ——ソヴィエト体制の一翼

ラトヴィアがソ連、ナチスを経て再びソ連に占領されると、リガには体制のシンボルとなる建物が求められた。スターリン様式は先述のラトヴィア科学アカデミーや、1954年からピート生産を目的に建設され、ロシア人その他4000名が労働者として移入したラトヴィア北部の都市セダなどに認められる。ラトヴィア科学アカデミーが当初コルホーズを所管する建物として計画されたこと³⁹は、機能的要請よりもスターリン様式の高層建築を建てるという象徴的要請が先立ったことを示す。旧市街や「資本主義都市」と呼ばれた新市街の建築（実際には独立以前の竣工が多かったはずである）のうち、質のよいものは特権階級の使用に、木造建築は共同住宅等に充てられた。旧市街の教会堂も空襲による破壊から一部が修築され、音楽ホール、展示場などの形態で姿を保った。建築・都市計画部門は郊外開発に注力したため、結果的に旧・新市街は資本主義的再開発から免れた。問題はその郊外、東岸地区である。

指導者がフルシチョフに交代して初めてスターリンの方針を批判した1954年12月7日の演説は、工場生産のコンクリート重量パネルの現場組立が最も効率的な建設方法であるとの内容であった。装飾的な部材をコンクリートパネルに付加しなければならぬスターリン様式と、また女性の煉瓦積み職人と煉瓦を運ぶ男性労働者の双方が農村部出身の非熟練労働者という建設慣行とを打破すると、労力は24%、生産高は5倍以上になると彼は主張した⁴⁰。さらに、ソヴィエトは西側とくに合衆国を中心に主張されていた近隣住区理論を採用した。幼稚園、託児所、学校を含み、コンクリート重量パネルによる高層住宅で公園、運動施設を囲み、最低限の商店と飲食店、稀に修理工や医者配置される大街区マイクロラヨンを郊外に続々と建設した。しかし例えば洗濯排水が考慮されないなど設備や環境の面でも劣悪な建物だった上に、竣工・入居後も公共交通は別部署なので整備されないなど、街区と都市の接合が貧弱だった⁴¹。またソヴィエト連邦全体の工業生産を手広く引き受けた都市リガはラトヴィア人の思惑を超える人口膨張

³⁵ Mansbach, op.cit., p.15.

³⁶ Jeremy Howard, *Art Nouveau: International and National Style in Europe*, Manchester: Manchester University Press, 1996, pp.185-6; Latvijas mākslas vēsture, "Sākumlapa", http://www.makslasvesture.lv/1840_-1890:_Makslas_dzive, accessed 2018.11.14.

³⁷ 伊藤, 前掲論文, p.5.

³⁸ Mansbach, op.cit., p.16.

³⁹ そのためラトヴィア側はこの建物の敷地を旧市街ではなく農村地帯に直結するリガ駅の南に移せた。Grava, op.cit., p. 20.

⁴⁰ Adrian Forty, *Concrete and Culture: A Material History*, London: Reaktion Books, 2012, pp. 149-159 [エイドリアン・フォーティ, 坂牛卓+遠見浩久+呉鴻逸+天内大樹訳『メディアとしてのコンクリート』鹿島出版会2016, pp.192-202].

⁴¹ Grava, op.cit., pp.13-14.

を示したため、独立回復の頃には深刻な住宅不足に陥っていた。現代に至るも、見かけの国土の利用度とは裏腹に、リガの1人あたり居住面積は20.3平米で、関東大都市圏の借家における1人あたり住宅床面積の23.8平米をも下回っている⁴²。設備や環境の面で劣った建築物にラトヴィア性を読み込みたくないのももっともだが、現代建築家はこのストックをどう改良していくかに興味を持つことだろうし⁴³、リガの郊外居住者を取り巻く環境の典型といえる。この状況を歴史的な視点で捉えることが、良好な居住環境の実現に不可欠と思われる。

ラトヴィアにおける独立回復運動は、大都市としてリガを発展させるためと政府が主張した地下鉄建設計画を一つの切っ掛けとしている。この計画が都市の環境を壊すという趣旨の環境保護運動がリガ市民の自主的な議論を蓄積させ、独立回復運動に発展したのである。しかしリガ旧市街のスカイラインはすでに、北側のダウガヴァ河畔の農業省と、先述の北東側旧レーニン通り、現ブルーヴィーバス(自由)通りに建つホテルによって損なわれたとされている。スターリン様式のラトヴィア科学アカデミー、あるいはダウガヴァ川中洲に建つ高さ368メートルのリガ・ラジオ・テレビ塔などを含め、確かに高層建築を解体すれば旧市街の教会尖塔は際立つだろうが、ここにも歴史と記憶を共有するよすがとしての建築物につきまとう、歴史観への対処の問題が生じよう。

(4) グローバル都市リガ——郷土への懸念

独立回復後のラトヴィアを取り巻く大きな問題の一つは、経済的な不安定による人口減である。ラトヴィア国立美術館に展示されていた美術家イヴァルス・ドルレ (Ivars Drulle) の作品《To My Homeland》では、作家の住居から半径15kmにある空家をすべて撮影したポジフィルム、それらを地図にプロットしたもの、またそのうち壁だけが残った一軒の空家に花壇を造り、通年撮影した映像などがセットとして提示された。これは同国の現状を極めて先鋭に捉えた感性の披瀝と呼べる。

2004年にラトヴィア人建築家2名の設計で竣工した地上27階建てのハンザバンカ(現・スウェドバンク)本社、コープ・ヒンメルブラウなどを含んだ2006年の国際指名コンペに国内事務所SZK and Partnersが勝利したものの、プロジェクトが止まっているリガ・コンサートホール、ラトヴィアからドイツに留学して終戦を迎え、合衆国に移住した建築家グナールス・ビルケルツ設計により2014年竣工したラトヴィア国立図書館などはすべて、ダウガヴァ川西岸を敷地としている。その他、旧市街から北方に伸びている港湾地区にもレム・コールハース設計の現代美術館

が構想されたことがあるが、新都心や住宅地の計画は旧市街から見てリガ国際空港の手前に該当するダウガヴァ川西岸(中洲のチープサラ島南部に残された、広大な開発保留地を含む)に集中している。これらの開発は、人口減の国家・都市に不要というわけではない。むしろリガの劣悪な郊外住宅地において、高層アパートの単なる解体ではなく、住宅一戸の面積の拡張、またソ連占領期の計画を超えた多様な用途を許容する建物への修繕や更新の余地を生むための計画とも言える。他国のこととは言え、これが同地の定住人口の維持に有効であることを願わずにはいられない。

リガから離れた場所に別荘を構える二拠点居住を考慮すると、いまやラトヴィア全土がリガを含めた関係人口をカウントせざるを得ない状況ではないだろうか。これは日本でも札幌、東京、福岡などを中心とした地方で先鋭的に始まっている事態と思われる。人口減や産業の空洞化の背景には当然ながら、独立回復後グローバル資本主義に巻き込まれ浮沈する同国の経済があるのだが、日本もそれを悠然と眺めていられる状況にはないだろう。ラトヴィアの現在に至る経緯を歴史的に把握することは、日本の蓄積と現況を重層的に把握する手がかりとしても重要と考えられる。

III. 結語

2016年後半に筆者の勤務する大学にラトヴィア建築展を巡回させたいと依頼を受け、公開講座「ラトヴィア文化ウィークス」というかたちに膨らませ、2017年に実際の準備と展示に立ち会った。本稿はその際に漠然と感じていたことを、建築展の胚胎する問題系のうち歴史観という入口から整理して記述に努めた。筆者は日本語を母語として留学歴もなく東京に生まれ育ち、日本の近代建築を研究対象としているため、比較の契機をこれまで持たなかった。建築展もまた必ずしも筆者の本筋の仕事ではないが、さまざまな僥倖から考察をかたちにできたものと感じる。関係の皆さまに改めて御礼を申し上げる。

⁴² 旧共産圏に共通する問題で、モスクワは16.7平米、ヴィリニウスは16.2平米である。Sasha Tsenkova, *Riga: Housing Policy and Practice A Framework for Reform*, Riga: Riga City Council, 2000, p.9. 挙げられた数字は国連の1997年の統計に拠っている。United Nations Economic Commission for Europe, *Human Settlement Trends in Central and Eastern Europe*, Geneva: UNECE, 1997. 東京圏については国土交通省「平成29年度住宅経済関連データ」〈9〉(2)「一人当たり住宅床面積の国際比較(壁芯換算値)」, <http://www.mlit.go.jp/common/001133728.xls>, 2018.11.14確認。

⁴³ 事実、2017年4月8日に東京工業大学で開かれた「ラトヴィア、融合の建築」展シンポジウムで建築事務所NRJAのウルディス・ルクシェヴィチスが発表した内容は、ソ連占領期の建築の保護に関わるものだった。さしあたり「NRJA、ラトヴィア展(Unwritten)」『a+u』新建築社、555号、2016.12, pp.114-115参照。

※本研究報告は、文部科学省科学研究費/若手研究(B)「近代日本の芸術観と建築・デザイン——デザイン思想のグローバル・ヒストリー(17K18003)」の成果の一部である。